

火

横光利一

青空文庫

初秋の夜で、雌めすのスイトが縁えんがわ側の敷居しきいの溝の中でゆるく触角を動かしていた。針仕事をしている母の前で長火鉢ながひばちにもたれている子は頭をだんだんと垂れた。鉄壘てつびんの手に触れかかると半分眼を開けて急いで頭を上げた。

「もうお寝。」

母は縫目ぬいめをくけながら子を見てそういった。子は黙って眼を大きく開けると再び鉄壘てつびんの蓋ふたの取手とってを指で廻し始めた。母はまたいった。

「明日また遅れると先生に叱られるえ。」

子はやはり黙っていた。そして長らくして、

「眠ねむたいわア。」といった。

「そうやでお眠ねむりっていうのやないの。」

「いやや。」

「お可かしい子やな、早はようお眠んかいな。」

子は立上つて母の肩の上へ負われるようにのしかかると、暫しばらく静しずかにしていたが、その中うちに両足で畳を蹴けり飛び上つた。母は前へ蹲かがむようにして「重おもたいがな、これ、針でつくえ。」肩の子を見向きながらいった。子は再び静になった。

「ええ、お母かさん、眠ねむたいわア。」

「そやでお眠たらええやないか、重たい重たい。」
子は「いやーや」というと母の肩からすべり下りて膝の上へ顔を埋めた。

「あぶないがな、針が刺さっているやないか。」

母は膝の上の布切きれを前の方へ押しやった。子の頭の頂いただきから首くびす条じへかけて片手で撫手なで下ろしながら低い声で、

「ほんとにもうお寝、え。」といった。

「お母さんも寝ないや。」

「人が笑うわ、九つもなってるくせに一人で寝んなんて。」
して母は些ちつと黙っていたが、「お前の頭はほんとうにええ格好や。」とつぶやいた。

母も子も黙っていた。隣家から酒気を含んだ高たか声こゑが聞えて来た。子は夕暮前に、井戸傍いどばたで隣家の主人が鶏とりをつぶしていたのを眼に浮べた。

「お母さん、お隣りのはな、鶏を食べていやはるのや。」と子は母を見上げていった。

「そんな事をいうものやない。」と母はいった。隣家の裏庭の重い障しょうじ子の開く音がすると、縁側ところの処へ近所の兼助かねすけという男が赤い顔をして立っていた。

「お里さとさん、御馳走ごっそだすぜ、さアお出いでやす。」そう男がいつて子供を抱く時のように両手を出して一度振るとひよろひよるとした。

母は微笑つて「え、大きに。」といった。

「さア、早ようやなけりや駄目まへんぜ。」

「この子がいますで後ほどまたおよばれますわ。」と母はいつた。

「何アに、米^よさんは一人寝せときやええさ、なア米さん、独^{ひと}人寝てるわのう。」と男は顔を少し突き出した。

子は男から顔をそむけて黙つて母の顔を見上げた。

「お前ひとり寝てる？」と母は訊^きいた。

子は顔を横に振つた。

「あんなにいうておくれはるのやで、お前ひとり寝てな、え、直^じきにお母さんが帰つて来るで。」

「好えさ好えさ、赤子あかごじやあるまいし。」そういうと男は「どっこいしょ。」と背後へ反り返そかえった。母は子の頭を膝から起して「待っておい。」といつて笑いながら縁側の方へ立った。そして「下駄げたがないわ。」と呟いた。

「下駄のような物入いるものか。」

と男はいうと彼女の手首を掴つかまえて背を向けると両手で彼女の足を抱いて歩き出した。母は男の背の上で「険あぶない険い。」と笑い声でいった。

子は縁側へ走り凭よつて戸袋とぶくろからのり出した。すると男の背上で両足をかかえられている母が隣家の庭の真中でひよろひよろしているを見た。子は男が憎くてならなかった。そして母が非常

に悪いことをしているような気がした。

「丁度好えぞ、兼さん。」

赤い顔をした隣家の主人がそういつて笑うと、傍の主婦は脱けた前歯を手で隠すようにして淡笑うすわらいをした。

子は室へやへは入って障子の片端を胸に押しつけると、指を舐なめてぷすぷすと幾つも障子に穴をあけた。もう眠たくなかった。

暫くして子は戸袋の処からまた隣家の庭をソツと覗のぞいた。母が兼の横に坐つて銚ちようし子を捧ささげるようにしているのが見えた。子はもう母が自分の方を向くだろうと思つてその方を長らく見ていた。母は銚ちようし子を持ったまま何か話している主人の顔を見続けていた。そして時々顎あごを動かした。しかし何時いつまでたつても子の方を向か

なかった。

子は悲しくなった。で、顔を戸袋からひっこめて「お母さん。」と呼んだ。

「はいはい。」

そう母はいった。ほど経て母が何かいって帰ってくるらしいけ
はいがしたので子は火鉢ひばちの傍へ走り込んだ。

母は眼の縁ふちを少し赤くして帰って来ると、

「まだ眠てやないの。」と微笑っていった。子は黙って母の手
を引張たって叩たたいた。

「さアもう寝な。また明日学校が遅れるえ。」

子は口を尖とがらせて母の手の指を咬かんだ。母は「痛ツ」といっ

て手を引っこめた、そして些ちよつと指頭ゆびさきを眺めてから「まあこの子こつたら。」といった。子は黙もくつて母を睥にらんでいた。そして、「お母さんの阿呆あほ。」というと母の手を掴つかんでもう一度咬かもうとしました。母は子の背中を押すようにして「此処ここをかたづけけたら直ぐ寝るでなお前は前さきへ寝てなえ、ほんとにお前は賢さきいえ。」というと子を寢床の方へ連れて行いつた。

二

その日は刺繡ししゅうの先生せんせいの市まちから村へ廻まわつて来るのが遅おそれていた。米の母は、六年前にアメリカへ行いつた良人おとこから病氣びやうきという報しらせ

を受けとつて以来半年余り送金が絶えているにもかかわらず、まだ刺繍を習っているということについて、親戚側からとやかくいわれた。しかし彼女は、少々の金を費してもこれさえ覚えておけばまさかの時に役立つといつて習い続けた。

刺繍の先生は遠い市から月に一回欠かさず村へ廻つて来た。米の村では母だけが刺繍を習っていた。これを習う最初にあたつて先ず、何処どこでも、その習う期間は先生を自分の家に宿泊させる約束をしなければならなかつた。米の家でもその約束を守っていた。初めのほどは、十五になつた米の姉と母とが習っていた。しかし、父から送金が絶えると共に母は娘を看護婦の見習生みならいせいとして市へやつて自分独り習い続けることにした。

米はその時から自分の家が非常に貧しくなったのだと知った。しかし、何処が前よりも貧しくなったのかは分らなかつた。また、ただ、姉が彼と一緒にの家にはないという事以外に生活の様子は前とは少しも變つていなかつた。

米は姉に逢あいたいと思つた。殊に二人が喧嘩けんかした時のことを想い出すと溜たまらなく逢あいたくなつた。しかし彼は姉へ手紙を出す時、かばんと小刀こがたなとを歸りに買つて来てくれとは必ず忘れずにいつも書いたが、逢あいたくてならぬとか、早く歸つてくれとかは決して書かなかつた。というのは、自分の愛情を現あらわすことを羞はづかしく思ひもしたし、また、そのことを母に見られるのをきまり悪く思つたからでもあつた。

三

学枚の門を出る時、米は白墨を拾った。帰る途々、みちみち彼は何処からくがき樂書をするに都合の好きそうな処をと捜しながら歩いた。土蔵ぞうの墨壁は一番魅力を持つていた。けれども余り綺麗きれいな壁であるといっすんと一寸ほどの線を引いて満足しておいた。

村端まで来て、道の片側に沿って流れている小川にかかった御み陰石かげいしの橋を見た時、米は此処が最も樂書するのに適していると思った。そして最初に滑なめらかそうな処を撰えらんで本という字を懸命に書いてみた。草履ぞうりは拭物ふきものの代りをした。彼は短い白墨が磨すり減へ

つて来ると上目うわめをつかつて、暫く空を見ていてから

「カネサント、オカサントユウベ」

と書いた。彼はその次を書かなかつた。なぜかという昨夜眼を醒さました時、真暗な自分の横で母と男とが低い声で話していたのはもしかしたなら夢であつたのかもしれないと思つたから。しかし、男の堅い手がそつと自分の手を強くおさ圧えて直ぐひっこめたのは確たしかに夢ではなかつたと思つた。そして、彼はそれ以外に何も記憶になかつた。

彼は立ち上つて石橋の上から去ろうとした、が、十歩ほど行くと後へ戻つて橋の上の字を草履で消した。そしてもう一度書いてみたけれどもやはり消した。後はぶらぶら歩き出すと急に走り出

した。走り出ると反り返って白墨を高く頭の上へ投げて踏み潰した。そしてまたぶらぶら五、六歩あるくと走り出した。

村へは入った処で染物屋があつた。米はその雨垂落に溜つてゐる美しい砂を見ると蹲み込んでそれを両手で掬つてはばらばら落してみた。終いには両足を投げ出した。そして、大きな砂粒をかき去けると人差指でオカサンハ、と書いた。もう昨夜の事は夢だとは思えなかつた。急に母を擲りつけたくなつた。その時彼は砂の中に透明な桃色をしたゴマの砂粒を見付けた、彼はそれを手の平で拭いてよく眺めていると何か貴い石にちがいないと思つた。

「ダイヤモンド
金剛石や！」

フと彼はそう思うとほんとうの金剛石のような気がした。するといよいよ金剛石だと思われた。彼はそれをすかして見てからもとあつた砂の上へ置いてみた。しかし、暫く見詰めていると外の砂と入り交つて分らなくなりそうになつたので直いでまた取り上げた。眼が些つと痛かつた。

彼はだんだん嬉しくなつて来た。小刀が買える、カバンが買える、とそう思った。が、直ぐその後に姉のことを思い浮べると、小刀もカバンも飛び去つて、ただこの金剛石を持つているということばかりで姉が家へ帰つて来られるような気がして来た。もうじつとしていられなかつた。

そこへ米より三つ上の辰たつという子が帰つて来た。

「金剛石やぞ、これ。」

米は些つと砂粒を差し出すと直ぐ背後へ廻した。

「嘘うそいえ。」と辰はいった。

米は金剛石を見せずにはいられなかつた。

辰はその砂粒を取ると暫く眺めていて

「こんな金剛石あるか。」

といった。そして、不意に半分手を差し出している米の傍から、
駆かけ出だした。米は、三、四間けん後を追いかけたが急に真ま蒼さな顔おを
して走り止まると大声で泣いた。

辰は米を見返つて溝の中へ捨てる真似をして道みち傍ばたの材木の上
へ金剛石を乗せて、赤目を一度してそのまま帰つた。

米は辰の姿が見えなくなると徐々そろそろ材木の方へ歩いて行つた。金剛石は材木の浅い割目の中で二重に見えていた。彼はそれを掌てのひらの上へ乗せると笑えて来た。

家へ帰ると彼は中へは入らずに直ぐ裏へ廻つて、流し元の水を受ける槽おけを埋めた水溜みずための縁の湿っぽい土の中へ金剛石を浅くつけた。そこには葉蘭はらんが沢山生えていたので、その一本の茎を中心はに小さい円を描いておいた。彼は、こうしておけば直きに金剛石が大きくなるにちがいないと思われた。それに此処は水をやらなくてもいいと思つた。

四

その夕方、米は昨日見付けた柏かしわの根株ねかぶの蜂の巣を遂に叩き壊したたこわて帰つて来た。そこへ母が奥から出て来て魚屋の通帳を彼に渡して牛肉の罐詰かんづめを買つて来いと命じた。米は母の顔が少し赤いと思つた。そして外へ出る時庭に見馴みなれない綺麗な下駄を一足見付けた。彼は畳のような下駄だと思つて履はこうとすると、母は「これ。」と顎を引いた。

米の家と魚屋とは親戚であつたし、馴なれていた。それでその魚屋の主人は米は障子を開ける前に、きつと叔父おじさんは常日いっものように笑っているだろうと思つて覗いて見たが、独人ひとりで恐い顔をして庭の同じ処を見詰めていた。米は今日は膝の上へ乗れない

と思つたが、障子を開けると直ぐ叔父はニコニコした。

「鐘詰、牛肉のや今日は。」

米がそういうと叔父は笑いながら立つて鐘詰棚へ手を延ばして「どうしたのや、先生が来たんやな。」といった。

米は家の庭にあつた畳のような下駄は刺繍の先生のだなど思つた。「どうや知らん。」と答えた。

叔父は鐘詰の口を開けながら風呂ふろへ入れてやろうかといった。

米は「やめや。」といった。すると叔父は突然、「どうや米、お前先生とお父とつつアんとどつちが好きや、うん。」と訊きいた。

「知らんわい。」

米は仰向きあおむになつた叔父の膝の上へ寝そべつてそういつた、そ

して叔父の鼻の孔はあな何なぜ黒いのだろうと考えた。

「知らん、阿呆なこといえ、お父つアんはもう嫁さんもち貰うてござるぞ、どうする、ん？」と叔父は覗き込んだ。

米は腹を波形に動かして「ちがうわい、ちがうわい。」といった。しかし叔父のいう事は真実のように思われて、もう父は帰つて来ないような気がして来た。母とさえ一緒にいる事が出来れば父の帰つて来る来ないはそう心にかからなかつた。すると、黙つて叔父の手の皮膚をつま摘み上げあていた彼は急に母が昨夜男と寝た事を自分が知つているのを氣使つて自分の留守に死んでいはすまいかと思われた。その中うちに涙が出て来た。で、草履を周章あわててはいて黙つて帰ろうとすると、叔父は「何んじや米。」といった。

けれど彼はやはり黙つて表へ出ると馳け出した。

家へ帰つた時母は罐詰を米から受け取つて「お前まアこの間着き返がえた着物やないか。」

と睥にらんだ。彼の着物の胸から腹へかけて罐詰の汁が飛かすり白の白い部分を汚していた。

母が自分を見たなら抱いてくれるとばかり思つていた米は何なぜだか急に他家の母の傍にいるような気がした。そして、身体をあちこちに廻しながら物を踏ふみ蹂にじるような格好をして母を見い見い外へ出て行こうとした。「通かよいは？」と母が訊いた。米は忘れて来たのを知つたが悲しくなつて来たので黙つて表へ出た。しかし、直ぐ金剛石のことを思い出すと裏へ廻つて行つて、夕ゆうやみ闇の迫つ

た葉蘭はらんの傍うづくまへ蹲うづくまつて、昼間描かいておいた小さい円まの上を指さで些ちつとおさ圧おさえてみた。すると、間もなく、姉が帰かえつて来て、家の者ものらがちりちりに生活くわんしなくてもいいようになると思おもわれた。しかし金剛石きんがうしではないと思おもうと金剛石きんがうしではないような氣きがして淋しみしくなつた。

外まが真ま暗くらになつてから家の中へ入いつた。やはり来ていたのは刺繡しすいの先生せんせいであつた。米こめのその夜の夕餉ゆうげの様ようは常日じょうじつとは變かつていた。餉ちやぶだい台だいは奥の間へ持つて行いかれたし、母ははが先生せんせいの傍そばへつききりなので彼は台所の畳たたみの上で独人ひとりあてがわれた冷ひやつこい方の御飯ごはんをよそつて食べ始めた。初めはつめの裡うちは牛肉ごうを食べたかつたので、母ははが持つて来てくれるまでに御飯ごはんを食くべてしまわないうつと少し

ずつ遅くかかって食べ出したが、何日の間にかお腹が膨れて来た。彼が食べ終わった頃、母が奥から米の傍へ皿を取りに出て来た。

「お漬物は。」と米は訊ねた。

「うむ？ うむ。」と母はいった。

「お漬物何処、お母さん。」と少し米が大きな声を出すと母は

「はいはい、今あげますよ。」といつて奥へ行った。しかし幾ら待っても母は出て来なかった。その中に米はもう漬物の事を忘れてしまつて箸のさきを濡らしては板の間へせつせと兵隊の画を描き初めた。どうしてこう幾度画いても帽子が小さくなるのだろうか。と苦しんだ。

奥から餉台や汚れた食器が台所へ歸つて来た。罐詰の牛肉はも

う皿の上から消えていた。米は牛肉をどうしたかと母に訊ねたか
つたが、そのことを奥の客に聞かれては羞しいと思つた。そして、
間もなく母は再び客に奪われた。

米はあきらめて黙つて紙石盤かみせきばんを出して来ると腹這いになつて
画をかき始めた。一頁に一つずつ先ず前の軍人から始めて二枚目
に糞くそを落している馬を描いた。しかし、馬の尾を高く上げていい
かどうかと迷わされた。そして、結局、細い勢の好い滝のような
曲つた尾を付けて納得した。次には姉の顔を描いた。下頬したほおの膨
らんだ円い輪廓りんかくを幾度も画き直してから眼鼻をつけて最後に鼻
柱の真中へ黒子ほくろを一つ打つた。そうして出来上つた南瓜かぼちゃのよう
な顔の横へ「ネーサンノカオ」と書いておいた。その顔を眺めて

いると、姉の黒子は黒いが画の方は白いと気が付いた。そして、それを黒くすると姉の顔に一層似つかわしくなるであろうと考えたけれどどうすれば黒くなるかという方法が分らなかったのもままにしておいた。

九時が打つともう米は眠たくなつた。奥から母の笑い声が聞えて来た。いつも奥で寝ている彼は、今夜は何処で寝て好いのか知らなかつた。すると、また、昨夜眼を醒した時の母と男との囁きささやを思い出した。そして、学校の帰り道に石橋の上へ書いた楽書らくがきを消したかどうかと気がかりになつて来た。それは消したようでもあるし消さないようにも思われた。

母が奥から出て来たとき、

「何処で寝るの。」

と米は訊いた。

「アそうそ、お前もう眠な。」

母はそういうと直ぐ奥へ引き返して行つた。そして奥の間で「些つと失礼します。」といつて蒲団を米の横へ持つて出て来から、楕円形の提灯ちようちんに火を照けた。蠟燭ろうそくは四寸すんほどもあつた。

「お前提灯持つて二階へお上り。」

と母はいつた。子が階段を昇ると母はその後から蒲団を擁かかえて昇つた。

母が蒲団を敷いている間、子は灯ひが消えないように提灯をさげ

ていた。「お母さんも寝な恐わい。」と子はいった。

「直ぐ来るえ。直つきや。」と母はいった。子はそれきり何ともいわなかった。母は梯子の中頃まで降りると「寝る時灯を消しな、え。」といった。子は「うん。」と行って灯のついたままの提灯を畳んで枕もとに置いてから、母について降りた。そして鉢へ冷めた鉄壺の湯をいっぱい注いで、それを再び二階へ持つて来て枕元の提灯の傍へおいた。寝巻を着返えて蒲団の中へは入ると子は俯伏せになって、川の水でも飲むような格好で一口鉢の湯を呑んだ。それから、母と自分との蒲団の領分を定めようと思つて母の木枕を捜したが見あたらなかった。で、身体を蒲団の片方へよせてまた鉢の湯を一口呑んだ。そして彼は額を枕にあてる

と母の笑い声が下から聞えて来た。何時^{いつ}母は寝に来るのかしらと思つたが母の来るまで楽しみに一口ずつ長らくかかつて鉢の湯を減らそうと心に決めた。湯は三口目に一分^ぶほど減つた。しかし四口目の頭は何時までたつても枕の上から上らなかつた。

その夜の一時過ぎに子は眼が醒めた。すると、寝巻を着た母が蒲団の上に坐つて彼をしつかりと抱いているのを知つた。母の背後にはランプを持った刺繍の先生が黙つて立つていた。あたりに煙が籠^{こも}つていた。そして、真黒に焼けて輪をはじけさせている提灯を中心に、枕元の畳の焦げた黒い部分が子の寝ていた枕の直ぐ傍で拵^{ひろ}がって来ていた。鉢は焼け残つた子の着物の上にひっくり

返っていた。子は瞑りかけた眼で焦げた畳を眺めていた。そして首を些つと横に振ると、母の拡がっている襟もとへ顔を擦りつけるようにしてかすれた声で

「早よう眠よう。」

といつてまた眼を閉じた。母は黙っていた。その中に彼女の眼が潤んで来た。

「ランプはもう要りませんか。」

と先生がいった。母はやはり黙つて少し前へ身体を動かした。

先生も黙つて下へ降りて行つた。室の中が暗くなると、母は子を一層強く促した。そして長らくして、

「虫が報らせたのやわ。」

と小さい声でつぶやいた。子はもういびきを立てていた。

青空文庫情報

底本：岩波文庫「日輪 春は馬車に乗って 他八篇」岩波書店

1981（昭和56）年8月17日第1刷

1997（平成9）年5月15日第23刷

入力：大野晋

校正：田尻幹二

1999年7月9日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>)

で作られました。入力、校正、制作にあたったの

は、ボランティアの皆さんです。

火

横光利一

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>